

## 歯肉炎スコアによる食生活指導効果の判定

幸地省子\*

要約：沖縄県平良市池間、狩俣地区における乳幼児の総合的歯科保健計画の試行のなかで、食生活指導の短期的成果を歯肉炎を指標として判定した。対照とした鏡原・宮原地区の乳幼児と比較して個人の平均歯肉炎スコアの低いものが多く、食生活指導の効果が認められた。また、歯肉炎スコアの変化から、両地区とも指導効果のみられないものが分化しつつあることが明らかとなった。

見出し語：歯肉炎スコア、食生活指導

目的：沖縄県平良市池間、狩俣地区における乳幼児の総合的歯科保健計画の試行<sup>1)</sup>（以下保健活動とする）も4年を終わろうとしている。ここでは、乳幼児の歯科保健指導の基本は、健全な食生活を身につけることにあり、これを持続することによって顎骨の発達を促し、口腔の自浄作用を発揮させて咬合系の健全な育成を図り、口腔の健康を維持、増進させることと考え、保健指導は、もっぱら食生活指導を中心に進めてきた。

1986年7月（池間では10月）からは食生活を変える強化期間を設定し、食生活指導の短

期的成果を歯肉炎を指標としてみていくことの是非について検討した。その結果、食生活指導の効果を判定する上で、歯肉炎の発現状態が1つの有効な指標となり得ることが示唆されたので<sup>2,3)</sup>、昭和62年度の池間、狩俣地区での保健活動に際しては、個人の平均歯肉炎スコアを利用した食生活指導を行ってきた。この研究は、これまでの総合的歯科保健活動における食生活指導の効果をみるため、平良市郊外の鏡原・宮原地区の乳幼児を対照として比較検討することを目的とした。

方法：対象は、池間、狩俣の乳幼児、41名と

\* 東北大学歯学部口腔外科学第二講座

(Department of Oral Surgery, Tohoku University School of Dentistry)

70名である。対照は、池間、狩俣における保健活動と同時期の10月に平良市鏡原・宮原地区の乳幼児200名に歯科健診を行うことを手紙で通知し、これに応じて受診した65名である。資料は、1987年10月に著者らの乳幼児の歯科健診基準<sup>4)</sup>に従って実施した保健活動時の健診結果とした。健診結果からまず個人の平均歯肉炎スコアを算

出し、さらに集団の平均歯肉炎スコアを算出した。歯科疾患全般の状態を把握するため、3地区の乳幼児の齲蝕、不調和型不正要因、歯の汚れの診査結果についても比較した。結果と考察：表1に、3地区の集団の平均歯肉炎スコアと歯科疾患の発現状態を示した。歯肉炎スコアは3地区ともほぼ同じ値で、有意差は認められなかった。個人平均歯肉炎スコアを0.1未満、0.5未満、1.0未満、1.0以上の4段階に区分し、それぞれの段階に分布していたものの割合を図1に示した。表2に、1986年6月、1987年6月とも0.5以上のスコアであったものの歯肉炎スコアの変化を、

表1. 集団の平均歯肉炎スコアと歯科疾患

	池間	狩俣	鏡原・宮原
歯肉炎スコア 平均値	0.36	0.34	0.38
標準偏差	0.44	0.31	0.31
齲蝕有病者率 (%)	82.9	81.2	73.8
総齲蝕率 (%)	64.2	50.5	34.7
未処置齲率 (%)	4.5	5.9	15.0
一人平均齲蝕数 (歯)	11.0	8.5	6.7
不調和型のあるもの (%)	51.3	48.7	60.3
歯の汚れのスコア	0.46	0.88	0.83

1987年6月に行った食生活の変化についての聞き取りの結果とともに示した。

集団の平均歯肉炎スコアは、3地区ともほぼ同じ値であったが、図1で示したようにその内容には差がみられた。池間、狩俣では、ほとんど歯肉炎がないスコア0.1未満の乳幼児の割合が鏡原・宮原の2倍あり、食生活指導の効果があったとみることができる。このことは、スコア0.0のもの割合が、池間では22.0%、狩俣では18.6%であり、鏡原・宮原の7.7%と比較して大きな値であったことから裏付けられた。しかし池間では、0.5以上の重症度の高いものの割合が3地区で最

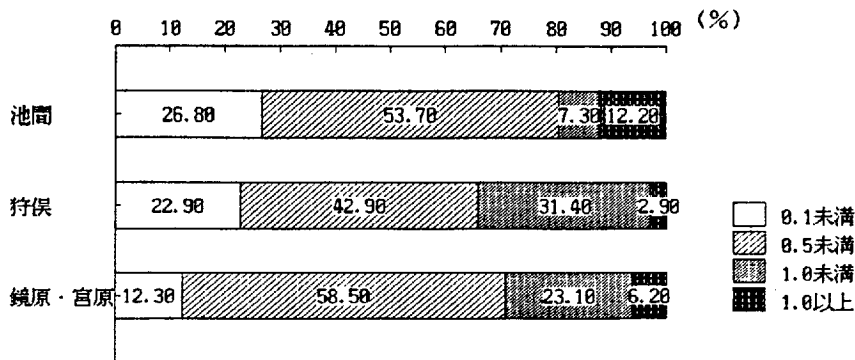


図1. 歯肉炎の重症度の比較

も高く、また狩俣では 0.5未満のものは少ないが、0.5以上 1.0未満のものが多く、全体として必ずしも健康な歯肉でないものが多く、食生活指導の効果は集団として認められるものの、個々の例では効果があつたものと効果がまだ

認められないものが分かれてきていることを示唆すると考えられた。個々の例についてこれまでのスコアの変化をみると、スコアが高く変化がみられないもの、スコアの変動が大きなものなどが分化してきていた。例えば表2で示したように、1986、1987年6月ともスコアが 0.5以上であったもののスコアの変化をみると、この期間スコア 0.5以上のことが多く、しかも食生活に変化なしと答えたものが6名中5名あつた。このことから両地区において徹底した食生活指導が必要なものが限定されてきていることがわかる。

歯科疾患の発現状態(表1)を比較すると、齲蝕有病者率、不調和型不正要因のあるものの割合は、池間、狩俣ともほぼ同じであつた。鏡原・宮原に比べると齲蝕のあるものの割合は多く、不調和型不正要因のあるものの割合は少なかった。また、歯の汚れのスコアは、池間が最も低く、狩俣、鏡原・宮原の約 1/2の値であつた。鏡原・宮原地区は、最近平良市のベッドタウンとなりつつあり、核家族が増加し、急速に都市化が進んで平良市市街地と変わらなくなつてきている。今回の同地区での健診は、これまで毎年7月に行われてい

表2. 重症度の高いものの歯肉炎スコアの変化

対象児	1986年			1987年		食生活の変化	
	6月	7月	10月	2月	6月		
池間 1	0.65	-	0.07	0.18	0.69	無	
狩俣	1	0.78	-	0.28	-	0.56	無
	2	0.67	-	0.80	0.58	0.62	無
	3	1.11	0.89	0.56	0.17	0.50	有
	4	0.77	1.14	0.50	1.47	0.89	無
	5	0.57	-	-	0.44	0.67	無

た乳幼児健診とは別に計画したもので、このような場合問題の多いこどもは通常受診しない傾向にあり、呼びかけに応じて健診を受けた乳幼児は、比較的問題の少ないものに限られていた可能性もあつた。対照とした鏡原・宮原の乳幼児が歯科疾患の少ない集団だと仮定しても、なおこの集団と比較して歯肉炎の発現状態には差がみられ、全体として食生活指導の効果があつたといふことができる。

文献:

- 1)昭和58年度沖縄県先島地方乳幼児健診団: 昭和58年度沖縄県先島地方乳幼児健診報告書-歯科-、1984.
- 2)幸地省子: 歯肉炎を指標とした食生活指導の効果の測定、母子保健システムの充実・改善に関する研究研究報告書、昭和61年度厚生省心身障害研究「母子保健システムの充実・改善に関する研究」研究班
- 3)幸地省子ほか: 歯肉炎を指標とした食生活指導効果の判定、口腔衛生会誌(投稿中)
- 4)幸地省子ほか: 母子健康手帳の歯科に関する記載事項についての検討、口腔衛生会誌、36:142-149、1986.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:沖縄県平良市池間、狩俣地区における乳幼児の総合的歯科保健計画の試行のなかで、食生活指導の短期的成果を歯肉炎を指標として判定した。対照とした鏡原・宮原地区の乳幼児と比較して個人の平均歯肉炎スコアの低いものが多く、食生活指導の効果が認められた。また、歯肉炎スコアの変化から、両地区とも指導効果のみられないものが分化しつつあることが明らかとなった。